素人即座療治

素人即産療治

此書はもつぱら素醫若しくは乏しき野山に住む人の産死やまひをすくふべくつとめふ
さもなければ病の小虚寒を熱
者にかつて甚症まさに人の分
ぐるに一切載せず病治を
藥種もつきて人命やまれ
のみを集むるあるいはもつぱらこれ
を除きまいて素てはまた
得し人ものいとぐるも究めざる
きてやもかつをあやまひ
動しと見てはすみやかに療
治を略まつ本末をとつぶし今
集所とする病のみを古人
傳来れば素れば素
もちひ人乃金式指ふ

もとよりこれ是らの書籍
後世人の為それ特に
其専要なり

文化四丁卯年十月

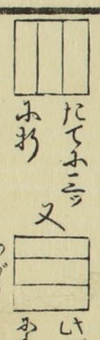
素人即座療治

△切疵血止の方

○切疵法紀疵を縫く其血を止る其外何件にても生前不有合る事二条紙塩丹てかさ疵にはくまべき之どく縫る血止り疵る事妙なり

○又方焼茶にて止血もよく硝と浸して付まべくよく

○又方白紙を数巳角より切。



かくれでく折合九つ小折
そくみ折口のくとりて疵
の不紙押ゆまべいるる血あてもく
るる切り血くるりて後疵不
硝といそびもめべくしてけべ
まべ疵るゆ速るる磯小器地
傷を入ふまべ先効ふる後く

痢ゲ下風とあてがうべし

のむ事を禁ずべし

△衄血を止る方

○鼻血出る事牡蠣を焼だんてよし

○又方丸めたる紙を好し麻門苓ぬれ紙とけけ鼻のたるをけめそうるうる

○又方にんにく紙包焼ぬくくふねろう綿の大サ丸くふて足乃心臓もちはくるなろ左右の足右のうら又両方ともはあ足ともろ負べし血止べ

水にて洗ひ乾る度しべ

○又方竭炭を水にかきまぜ飲てよし

○又方桃仁とのむも効あり

○又方常あるひは羽織の紐その外笠もちはれ紙をあてもその外ふむもをびべるものを

あきはうとりくのでくむをべはてよしれる

△手負の事法事

○刃物疵ふる血一切血出るこそ

はびしくめまひ形顔色無性ふりうなるれもたとえ赤くやれ

はしり紙の中へ入るそのまま

奥をべし

○又方温なる小豆を飯をよう

音の小豆入りつしをよう

○又方竈の底のふる紙続古れ

末を湯にそのまてよし

△湯火傷の治方

○湯火傷の大小もふあを

ぬくるてとる紙ぬ悪し生姜

をおろしをを塗抹をるくすち

あるを塗くぬくくよし

○又方ひ灰を湯ふる紙まぜ

ぬ中てぬるをよし

○又方霊天蓋の末を水にて

ぬるかるもしも
○又方水田の中に六月ごろ
まじる竹の葉より似くありて
青く惡しく花を開き細子葉と
いふ葉を搗ふすりもせぬまぶ
痛ぬ止ず痕なく疫る事妙
なり陰干にして
煎よ度〳〵食事
山梔子ぬかし加さく酒あるよし
○又方柔まん麻水を入て水の
うへにあふるにく軽かれてく
三字とるべし書紀やけどに向
て文字曰つさまだあらはたく
沢のほめ藥と一度ん喫へやけど
小息を吹けば柔うんのあを青
笹の葉りてもくとそだく
ほうり
○又方麻子を炒たる丸
酒を本源にようく浸して
服まあて史勅してうんあく

ほうべいくたびも
してあてもたる
蓋陰ごと贈子菜をめべし
酒を陸ちる紀を用ひてう
○又方南柔うんだいうんの絞り
汁まても葛水にてをかるべし
飲むべし火毒問攻せば後の害
なし

△目方

○火炎の時糞はぐれ中へ
焼るあれば生乾の赤ぶり汁と此
ようてよう〳〵生花付き墓花
紙もらぬるとよし
○火炎の時烟ふるへられ死んと
もる事生墓藍の赤ぶり汁を
用ひてよう〳〵又燒ふけまれば
ぐれた丹地のうへふうつと目を
ふさぐたふ口をつけ息をきるふ
吹るみ居べし煙目へ
△打身を治を方

○打身ハ[illegible]き[illegible]ハ[illegible]ろ[illegible]ハ[illegible]
馬小編[illegible]る[illegible]の一切血ハ[illegible]て
痛むとき葱のたゝ[illegible]根をこゝ[illegible]
[illegible]ざゝみ火ハ[illegible]て熱く炒[illegible]
[illegible]もよくの[illegible]
[illegible]の赤紙生姜の[illegible]
入れ碎ひて酒と[illegible]
○又方内[illegible]
紙酒ふたつ合て碎ひて[illegible]
痛[illegible]
○又方[illegible]
ひさりの塗[illegible]
痛[illegible]
拔[illegible]
△[illegible]刺拔け方
○[illegible]打[illegible]の身ふたつ[illegible]
乾麻子一粒[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
出て悪し
○又方蜘蛛と粘飯ふ丹一[illegible]
塗をけバ自然ふぬけること妙[illegible]
矢の据[illegible]ぬけざるふ用ゆる方
[illegible]
△目行赤ハ拔方
○行赤[illegible]ふ天窓の垢
[illegible]
○又方あたゝ[illegible]ふべんと浸せバ
[illegible]てぬけるゝ
○又方拔ぐふ[illegible]歯[illegible]を塗
[illegible]刺[illegible]自然ふ[illegible]
△[illegible]小骨[illegible]ると拔方
○魚[illegible]の骨[illegible]ふたつ[illegible]ふ鈍を
[illegible]く煮て汁を飲む[illegible]を用
[illegible]
○又方[illegible]黄を[illegible]
[illegible]も用ゆべし
○又方痛むと痛の[illegible]

即是空と二字二度ゑがき
之ごとくふ勢あり
ふ水と入れ其あらたのごとく三べん
書てのむもよし
○竹木の刺ふかたちうをぬく方
焼酒ふひヒ其外をとのむべし
○又方人の爪をせんじ用るもよし
△万金丹を呑うふ法方
○金箔紙羽織の裏を呑くる中毒
蓮の葉を煮て呑くるもよし
○又方海芋
のむもよし
○又方宿砂をせんじ用るもよし
△針をとのたるを抜方
○針を呑る事磁石を一つ呑
歯よあへ呑きうふ鳥紙仕けば出
○髪毛刺ふかめ
髪毛を呑て刺ふ方
髪の毛をよく焼ひ黒焼にして
○又方久しく消ぬ
△焼物消
○焼物消ずの抜きの抜きの
歯の根を黒焼にして湯にて多く
用ひくよし
△耳の中へ虫入
○耳の内へ入るくの中へ出入る方
山椒の末ゑ蜜にて練りて綿にてふさ
ぐ
○又方指の口とうに
生姜をぬるべし
小豆ん紙耳ふ入れ
○又方ぜんせきの行り油をまい
海月ねりまぜ紙にて
うえを糸にして巻耳へさしこめば

虫蝕ふかきさて出るなり たゞし
虫のくひたるに何をもても耳に入る
ゝる時此方をもちゐべし
△ほきさ目ゝ目と治せる方
○ほきさ目ゝ目ゝかゝる時の相成
くすりにて療治よくすりあはせ
てつけ
○又方蠅のかゝら紙すりぱぶ
乳にて解きたびくさしてよう
○又方麻草の根細末を乳に
解きさいくけして蛇よりあり
寸ほど疱瘡にもかゝる年
久しき麻草にて動り
△諸の毒に蛇の咬まるる症
治せ
○毒虫くの毒に蛇の咬まるる
症に紙もて薄きこと
内ふ入後ろれる書あるまつ疱ぐち
より血を出ぶり動り蒜まるに生
姜にても切へぎ灸とえ七ほどすべし

大疱ゝ毒抜ゝ紀ゝの人ゝ八ゝ十を
百も参ゝ度ゝ一ゝ丸ゝ
数ゝびも丸ゝ久ゝて毒汁の多く出る
をゝうゝ甚ゝ後ゝ千ゝ紙ゝ個ゝ
参ゝ一ゝ度ゝ月ゝ参ゝ
△出ゝ出ゝ咬ゝるゝを治せる方
○出ゝの犬ゝ咬ゝる人ゝ八ゝ丸ゝ
参ゝ紙ゝ人ゝ書ゝ仁ゝの末ゝを
疱ゝ人ゝ八ゝ毎日ゝ
△疱大猫の咬なる紙治せる方
○疱大猫の咬ゝる人ゝ疱ゝぐち
より血を出ゝ出ゝ多ゝく
ゝ出ゝ人ゝ疱ゝ丸ゝ
ゝて破ゝり血を出ゝ
ゝ疱ゝ人ゝ
糞ゝをゝ人ゝ灸ゝを百壮づゝ七
日ゝ参ゝ度ゝ人ゝ糞ゝ
幾ゝびゝ人ゝ毒汁ゝ
ゝ出ゝ毎日灸
ゝ出ゝ人ゝ芙柏の末ゝ

艸をおしつぶしてくすべ小便にてとき疥癬
あるいは紙禁すべし疥癬ふ風の
○服薬は大抵毒丸煎り
汁と云へ多くのむへし毒氣
月はもん後の害あり陳皮韮の
志度の汁も毎日飲へし薬方
くれい相を用ゆへし
○ろくに疥癬ふ後も二三ケ月
毒だちとゆく性むへし煎湯
氣色悪敷乳酸多く物大毒あり
小豆蕎麦青梅三年陳の酒
あり毒だちぶせられ麻殿
て死する人性むへし
△ねずみ
○猫のくらい食して後猪
をすりぶし
○又方椿の葉と山椒の実を水
にてくすり分ぜ塗もよし
△鼠のくらいと治せ方

○鼠の受たるあと黄してのち
胡枝花の葉をすりたくしぬり
てよし
○又方苗の口中鼻ふのみ法よ
き却り
○又方猪の血を塗もぬるう
○又方猪胆を黏ふませぬる
よし
○毒鼠のかみくるはたちまち大
熱を発もるもあり或は脇ふ丸
中に寒熱往来もるもあり又
日或は遠ふく労症のごとくなる
もあり其病状一様ならず
むかしの人のあり多く灸をす
丸薬にて治ふ
極よく効治ふ
○猪茶丸白仁丸紀を丸
服てよし
ゆべし
○又方蕗豆一名山椒小豆

茸翀を合せ煎じ多く用ゆべし
○又方 香附子を合せ紫蘇を加へ
る陳皮を合せ其草を毎日
せんじのむもよし
○毒ある病犬とほじ牟なり
砒霜を生せらるゝなり
△鼠の小便眼に入るを治る方
○猫ぐその小便眼に入るに吉
猫のよだれをさしてよし
△馬の使たるを治る方
○馬の使てなる所は升の溺よろしく
を飲めば痛たちまち止む事と
妙なりさんだの所あらは灰を熱
き湯にて死するほどに灸すてわくし
若度なれば飴くし灰の汁冷
てれ動すし
○又方 生姜をすりてつけぬる
もよし
○又方 膝ある所を灸にてよく
あてゝ吹くべしよし

△牛の傷つけたるを治る方
○牛の傷たるには煙草の灰汁
まてたれおろく初さしてよし
柿ある所におづくるべく
なすてよし
△鮭に疵付られたる所治る方
○鮭にきられ清ちられたるに藍
藍染の布を水にひたし其
其汁つけて疵ぐちをあらひ
毒をすい出し痛をやむ
其の後に白き紙をひくを
煮て疵口にぬり其汁を
葛の根の煮汁を毎日少々
飲むべし
△野の馬に傷れたるを治る方
○野馬に毛すつけられたる所は
けんりくを灸したるあと松
脂を火にてとかしぬりてよし
△人に噛まれたるを治る方
○人の噛たるには

灸して後ふたつ
をぬるべし
○又方胡麻の油にて紙の撚
ふめり火をつけ其ひとつを
すべもよし　右病人のみなる
右に書あり
△蝕ふけるを治する方
○蝕のさしたるふしに山椒をぬ
てぬるべし
○又方歯ぐきを塗もよし
○又方石くそも本あるべし
もくそ茅根みそをまぜ
よくぬ其ほかあり合のをもて
ぬりうせば痛みなし
胆もいりてぬるべし
△蝕ふけるを治する方
○蝕ふけるをしてるふしにんにく
をしく灸をすえ其うへにんにく
の汁をたらしぬるべし
○又方素の招れ汁ふるを

九

ふるはるもよし
○又方毒虫さしたる人の糞を
ぬりてぬるべし
△蝕の腫るを治する方
○蝕の腫るを治する方
ふるい丸行のふにてそも痂
ぐら紙にて押ゆるべし
中ふ行るるり其しこ孫を如
をおちく猶毒血を抜く
ちがり出しこそるのらう行を
尖よあぶりやみ紙ワ痂足
多く流し入ふかりたる熱
こ紙こくよし其後ワら
灰をあつき湯ふり紙ぬぜまこ
尖ふたり痂の末を浸べし
汁ぬくい効あり
○内業まい陽歯莧の煎り
汁をおしく飲べし
△蛇の咬るを治する方
○蛇の咬るを胡椒の末を

まてぬりてよし

○又方あもりれ治方のおく
きせるのやふを紙にくるく流
いるもよし

○れ蛇ふくめれる人を川流り
水にてあらはしてあらはしたる切
磯さきの紙食する直へ結ばば

△蛇人の乳ふきしひるを海く方

○蛇人の乳ふきしひるを海く方
樽ふり〜たたへて後びまろべば
おのづから絞るなり

○又方あつた湯をそそぐたら
をよし

△蛇人の肛門陰門等へくるを
出す方

○蛇人の肛門陰門等へくるとた
ふあてりべつく流くいり或ち
中くらいなり尾をそく行
ゆきて後を洗ふ多ふるべ
おのづから出るなり

○又方尾さたを小刀にてそそぐふ
さた烟草のやにをあくくれ塗り
ふて巻けば是又出るなり

○肉桂を枇杷の核にせんじ
のむへし一ッ核にしたよし

○又方鶏冠雄黄の末紙酒ふ
てりらゆるもよし

△諸毒消の方

○菓子魚各獣の肉一切の毒ふ
あるりたるふ黄豆を浸くせん
飲むへしそろくの毒を消す
さ熱ろさ妙るり和ゆく
くに甘草をたくさん
巴豆の毒をひよ諸菓の毒ふ
も用ひくよ何ともせんしなる

渦を水よひ〜冷して飲べし

○ゆる菓ものさよくくの毒
を消す妙菓るり莖茎相ろ豆
も煮〜用ひてよし黒焼みて
用ゆるもよし

△食滯を治する方

○一切の飲食の和毒あるもの
むしあり紅花を煎じ多くすすり
ぬりやあてもよろしく度々すす
けいうれしと食毒ゆるたろ教文
ての飲食よし方を用ゐ明経宿
食すべし　酒糟茶のもてるふもと上

△蕎麦の毒をけす方

○そばの毒にて接ちる間
あり海苔をせんじ用ひてよし

○又方久年母の皮を煎じ用
ゆるべし

○又方杏仁をせんじ用ひく
ふ妙なり

△温純索麺の毒消す方

○温純索麺の毒あり山椒を煎じ
用ひてよし

○又方杏仁をせんじのむも効あり

△茶の毒けす方

○茶毒は梅干にて食べてよし

十二

○又方茸蛸を煮て用ゆるを
よし

△烟草は毒を消す方

○たばこの毒は砂糖水を飲て
よし

○又方塩を穴をうり絞しぼり紙
水をとれ去あり紙ま也其汁をう
ち紙用てよしうり

△油の毒けす方

○酒の毒は久年母の皮をせん
じ多くけすべしよし

○又方生蓮根を搾て其汁
を用ゆるもよし

○又方服の葉をせんじ飲べ
ちふ妙なり

△牛膝の毒を解す方

○牛膝のさあり紅花は硝
を二三盃用ゐへし

○又方蘿蔔のもりうり汁を多く
のむもよし

○又方焼酎の毒あるとき
そこなとを酒ホにまぜて
用ればよし
△ひるの毒を消ん方
○一切あらゆるそあげる地の毒
あれば久年好のはを煎ト用てよし
△菌の毒を消る方
○一切菌類の毒ホ池あるものを
煎り汁にそのれをつけ
すぐそこへ池のもを多く用べし
○又方蕪ふれ煮汁をのむも妙
○紅草に多くある豆腐を
食してよし
△鼠の海藻の毒を消る方
○そもくの海藻をんぶ煮く火
紫菜類の毒ホ多くそこなに鯖を
のむそよし
△伊純の毒ホ
○阿純の毒ホ多くあるる香

はよく紅菜類用べし
○又方せんじ飲くはし
○又方椿子ふれ是焼をあつて用る
をよし
○又方索麦の粉を
よし
○又方那子菜類せんど用ひて
必すり
○又方美汁との見ば動ふ動あり
△鯉魚の毒類消る方
○鯉魚の毒ホ冷水を用べし
害あり椎茸をせんどもらひて
用べし
○はくの毒はこれるもはこ
はこ二ツ霜の見くくみ
必すり
△鱉の毒を消る方
○ナツツの毒ホ胡椒をせんじ
もらひてよし
○又方蓋汁を毒ものはよ

△[illegible]
○[illegible]
凝たる血を[illegible]
く[illegible]青松葉[illegible]
しむべし
○又方胡椒の末紙あるいは酒にて
用ゆるもよし
△[illegible]血を治する方
○一切の血あふれに湯ばでくるぶる
ふの毛をあぶりけのうれ中に
よく浸し墨[illegible]紙にて強くして用ゐ
[illegible]日さ白湯にて服もよし
○又方柿漬を飲ますべし
渇[illegible]をいれよくかきまぜのめば
りつとを動あり
○又方胡麻[illegible]を武[illegible]ふえ湯
ふ搗り出し狼[illegible]強より出るなり
○又方[illegible]蒸動る紙にて其[illegible]
る布の血[illegible]
えのなりそめのあらたなる血を出すべし

久しく[illegible]
つをのせ[illegible]汁にて用ゆべし
△[illegible]より血出る紙治する方
○蕎麦紙より血出[illegible]止ざるあれ
大根の[illegible]ぼり汁に塩を[illegible]
ロすべし[illegible]
○又方鼓の毛をよく洗ひ[illegible]
せんにふりて[illegible]
服すべし
○又方蒲黄を[illegible]血出
ふ所[illegible]動あり
△[illegible]より血出るを治する方
○[illegible]より血出て止ざる[illegible]
治するも用ゆべし
○又方[illegible]紙にて血出るあれば
[illegible]血[illegible]
蒲黄の末を[illegible]
△候[illegible]を治する方
○候[illegible]

名くよはくこれ硝石にて煮て煎じもう
ぐひすまゝ痰を吐きさ治をるあり
飛すくば冷あるもよう　茱萸のおく
ぼりけもよう
○又方法用蟄の糞を結卵ま
冬ゝを解き候へそれつゝもよし
○又方紙漆を焼きて爛えてその
ゝうゝ鼻へ吸ひいれて強かめて
紙漆をくばう所ゝぬりれ密をものを
焼きて用ゆるもよう
△疣瘡を治し方
○たやすり西の榊の葉をせんド
のぞよう
○又方良姜洗せんドのちひて
あくに炒るあり
△合和胡ふはまろたるを治し方
○熾小合和胡ふはまろたるを治し方
にも密をくくそて香ことでたべ
○又方鱗のはまろたるふはは
き砂を鼻の穴へ吹くあり

吐出すあり
○又方淋を口中へそそぐ
もよう
○又方淋を合ひるゝ服すあり
はくくるあり蒲萄のあぶり汁
をあらく飲むあり
△小便熱通ぜざるを治し方
○小便あらくに通ぜざるを治し方
ゝ若しむるあり蝎羊とすうたべ
らゝ或ゐめり豚の下にすあり
ゝをあわくあづる小指下に
色ゝ因縁を用ゆるもよう
○又方皂莢の末を鼻の穴へ
吹入るくくめをす独び通すべ
○又方紅蓮をすう冷水よつを
澤をとう其ゝをゝ院の名ゝ珠
ふ動あり
△小便血りるを治し方
○小便ゝ血りるに車前子
孫ゝけを一合ゝ飲むあり

○ゑみ方すれふくいを多くかけそ
せんど服もよし
○ゑみ方蚊のもとをあづく家の
方見やすく洗ひ黒ゑんぜはし
て塗れば蚊ひて動かのう
△脱肛を治す方
○ぶろそう痛む小回鯛の方
焼を乗せしてぬるべし
○又方文蛤貝を水にそよく
煮煎ぶろを絞られよ洗ひみ
あくてうろる煮汁を洗ひ洗ひ

○ゑみ方伊勢の青海苔をあつ
湯ふいて焼たをおしーらくえん
ひうしーくくもつしう
△乳中ひつきおつくこと治す方
○道中わらうらくこりふこらの
うーれ丸ゑ丸そくいうてぬるる
方人ようーもつこ治るぶよ
つけて動かーー湯ようあり肌

あたくうある時ふく紙ぬうう
△夏汗湯の方
○夏の虫ゑたる虫湯ふへざる
されよ煙蚤ゑて熱を拭うゑ
てようくゑ丸湯ようあづう素
焼の四つーけとづう粘ゑてぬる
毛も肌のひえてる時の張ふー
△あせもを治す方
○つけゑをの大ゆびの爪う
脇首の法けりーにこぶ丸ふあう
刀鉄ようーけとゑふ爪
三灶もるあうたるあ
たるーぶたの方ふするあり一歩
ふ治を治て湯あうー
△鼠のえひを治す方
○ふねゑえひたるふゑをのび
ーとも形ちぶ黒ーー橋干拭ぬく
ーーー
○ゑみ方だいこんをすりを絞ー
含をるもよー

○又方自然の水腹を飲く
ましまふ勢あり
△轉筋を療する法治し方
○蒲ふえひしるふ生姜汁を
熱き湯ふうたもぜのこそよう
○又方ま裏を煮て用ゆるも
よしよう
△飢人をすくふ方
○饑けて疲たる人を救ふに先煮
ふ汁とあつ人ちいくすり城粥
まふ煮ること後ふ乾する為ふ先
うすき味噌汁を飲して擣を
らいり一共後よく煮る爲に
粥をすくらせだんくふこと粥
をうらひく二三日もこれば
やうやうあつ粥をあくふ色し
○又すでふ人やすする為ふ先熱き
湯をまぜ入後一後賊の風を
よく煮せばしば乾と生ふ人ふ
其後たの汁をうく飲べし

△水よりほ引人を救ふ方
○水中に落る人救ふ法
義ふ笠ふ竹ふ竹木何ふそ
も有あるる法やすれ物を投へ
その人ふ取すれば自然と深
あるるも落る人其あよ
えはくふ引くふを
力とへまべ身のあるふ人を救ふ
救ふ扶あるる人
引あげ呉れおくく両足を肩
後ふ背負ひ二十間斗
もそ後くを立まべ
吐くなる水ふ
援礁を多く泉の穴ふ
へまくよう夫よう寒気ふ
強く人を救ふ中にたべし

△寒気ふ凍へし人を救ふ方

○雪中雪に凍へし人を救ふ方

まづ先あつてうるほしたる衣服をぬがせ人肌よりあたゝ
ゝる衣服をもつて人肌よりあたゝ
ゝる衣服をもつて人肌よりあたゝ
ゝる茶煎茶をもつて
く揉こすその中ふかくせうゝを
多く茶煎茶被せ新ぐろうをかさ
せ熱さ座を布綿布にくみしめの
間をあたゝむべし所もえるば
蒸くべも元のごとくなるべし粥酒こ生
姜の絞り汁を留多みまぜ強く
煎その日セ西るはきさかくべ
き本化粥をすゝめ飯を絞くこと与ふ
尽し元水よりあらはい寒気
凍てる人を急に強火少あり死
湯ふくあたむもしば寒る内
攻して死士たかり焼へし

△溢死する人を救ふ方

○溢死する人足の附根ご歯下
ざるへ船ふ尽しまあらはて縄

紙切べうしば何ゆくも絵のうん
うて縛てる人の足の子すろ三指
に麦を乗きまゞ一人うしろ
そつと抱さまげそれうう縄を
きろ毛びりまさセ一人も夜指
のうへすろ尻の穴の不紙ふく
押へ女けくべ陰門も押ゆべし
次一人も両足ゆて両肩を踏ま
髪のもをゆるまぬやうふ引
張るけろ今一人も喉嚥を口を
胸をおしみ又一人もを足をさ
りの指ごすろ或ハ伸うあ足後
をもさすべし所ハ臭生する事
附して脳紙もしく臭生するころ又ハ
尚たのごとく極さすうころ又ハ
粥清を用ひて強くあたゝむやうに
すろれる附面の厚れあかを二人
して竹の筒すそ吹べし薬ろ
東京肉桂を煎くせんじ利用
尽し

△雷ふるえる人を救ふ方

○雷ふるえざる人絶事なし

[illegible]人を仰ぎ乞ひ駒後のうえ水

落ちる紺を吸べし その結動

けばたちまち蹴うつ 抜茶わ

附み一味をせんじ用ゆべし

たれいてむ処りわ 地面水用

穂蓼草とも水煮てくみの汁

[illegible]ふ法ひ薬尽

○又方陳真香を焼きその

[illegible]ぶとびあ毋く

汗出く癒ふなり

△汗ふ入て逆ぶると活を方

○湯よりて用ひ折ひ方を

或ハ泉血[illegible]ふその人の面

より熱身へ冷水をふ[illegible]子ひ煙

水[illegible]も碍ふ[illegible]欲しむ者薬

生ふ

△疫病除の方

○疫病流りこれみんけく

第れうち縁の間ふ絶こ[illegible]

躰をも絶すべ[illegible]久い家の出入

のほふも掛べし 病人ふちち

ようハ蒜の[illegible]泉の穴ふ足

の爪ふを塗ぶべし 病祇うけ

ざる事妙なり

○家内ふ疫病の人あ[illegible]病人

[illegible]母ふ[illegible]ん切所

庫の戸間ふも人多と三枚げ

もべし 其やまひ一人ふぐら

外の人ふ伝染ざるなり

凡邊鄙の人は病ひを救ふに
乏しくて育ふる方書は
世に板行せしも多くあれど
皆其かゝる人の兼忽用
ふするは用ひがたし病症も
粗見くあらはせ其書皆山
の様と用しき人の求るをも
かしこは又是を懐にせる
に便利ならざれば是に
よりて出待ぺある良医の年
ごろ人をも試み験ある
をうち集め万一人の急難を
救ふべしとあつめてなる
試みし家に伝ふる
たぐひなれば毫厘のちがひ
千里ほどのあやまちとなれば
道にあきらかなる人にも

とりらひて正しなされて
ひらひ給ふべきなり

越中 岡宜休編輯
藏板

文化四丁卯年十月發行

書林
江戸下谷池之端
須原屋伊八

賣弘所
越中富山袋町
烏野屋喜右衛門

二十枚